

國學院大學學術情報リポジトリ

神奈川県中郡二宮町方言のアクセント：
アクセントの体系と名詞・動詞・形容詞のアクセント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001444

神奈川県中郡二宮町方言のアクセント —アクセントの体系と名詞・動詞・形容詞のアクセント—

坂 本 薫

論文要旨

神奈川県中郡二宮町は神奈川県の西部、相模湾沿岸に位置する人口2万8千の町である。同町の方言は西関東方言に属し、さらに日野資純（1965）によると神奈川県方言のうちの神奈川県南部方言に属する。本稿では生え抜きの話者を対象にしたアクセントの詳細な記述をもとに立てたアクセントの体系を示す。そして、名詞、動詞、形容詞のアクセントの実態を老年層、青年層の二つの年代に分けて報告する。二宮町方言のアクセントは、それぞれの品詞において年代差がみられ、青年層では共通語化が進んでいるが、老年層においては方言のアクセントの古い姿を保持していることが観察からわかった。また、東京のアクセントの体系と比較をし、二宮町方言の老年層のアクセントは、東京および周辺の古いアクセントの特徴や、東京とは異なる地域方言の特徴を残していることがわかった。

1. はじめに

神奈川県中郡二宮町は神奈川県の西部、相模湾沿岸に位置する人口2万8千の町である。同町の方言は西関東方言に属し、さらに日野資純（1965）によると神奈川県南部方言に属する。本稿では同町で生育した話者を対象に行った調査の結果から抽出したアクセントの体系を示し、名詞、動詞、形容詞のアクセントの実態を記述する。得られた結果については、まず、年代差に着目して分析を行う。本稿では同地方の伝統的なアクセントを保持していると考えられる老年層とより新しいアクセントの特徴を持つ青年層の2つの年代に分けて年代による差を観察する。なお、本稿では調査から得られたアクセントについて隣接する東京のアクセントと照らし合わせて考察するが、東京語のアクセントとその伝統的な相については金田一春彦・監修（2010）『新明解日本語アクセント辞典 CD付き』を主に参照した。

神奈川県方言は、東京に隣接するという地理的条件から、方言の記述がこれまでに十分になされてきていない。二宮町方言のアクセントの特徴を明らかにするとともに、県内の

方言の実態を詳細に記述することで、同県の方言研究の発展に寄与することも本稿の目的である。

調査から明らかになったことの要点を以下に上げる。

- ・二宮町方言のアクセントの体系は、アクセントの「下がり目」の有無、そしてその位置が弁別の特徴であり、アクセントの型の対立は n 拍の語に対して $n + 1$ 種ある。
- ・老年層話者の3拍名詞のアクセントに、同方言の古いアクセントの姿を残していると思われる尾高型と中高型のアクセントで発音される語が観察された。
- ・平板型の動詞で、連用形（「に行く」が接続するとき）と準体助詞「の」が接続するとき、「だろう」が接続するときのアクセントに年代差が見られた。
- ・形容詞は、年代によって姿は異なるものの型の対立が失われている。活用形のアクセントは老年層では対立を保つが複数の活用形のアクセントの型に揺れが観察された。青年層では対立は失われている。

2. 本稿で用いる表記について

音声の表記はカタカナを用いる。無声化している拍についてはひらがなを用い、高い拍をゴシック体、低い拍を明朝体で表記する。また、拍を記号で表す場合、●は高い拍を、○低い拍を表す。また、▶は高い付属語の拍、▷は低い付属語の拍を表す。アクセントの体系を表す際、音韻論的解釈は / / で囲み、拍を○で、アクセントの「下がり目」を] で示した。

3. 調査について

調査は平成25年4月～9月に、中郡二宮町内で行った。

3.1. 調査地点

二宮町は神奈川県西部、相模湾沿岸に位置する町で、東に隣接する大磯町とともに中郡に属する。このほか北に足柄上郡中井町と平塚市、西に小田原市と隣接している。1889(明治22)年に一色、川匂、中里、二宮、山西の5つの村が合併して成立した吾妻村が前身で1935(昭和10)年に町制施行。人口は2016年6月現在およそ28000人。

北部は丘陵地で南部は相模湾に面しており、沿岸には東海道(国道一号線)が東西を横断している。このほか、主たる交通としてJ R 東海道本線や小田原厚木道路、西湘バイパ

スなどがある。主な産業は農業で近代より果樹栽培が盛んである。

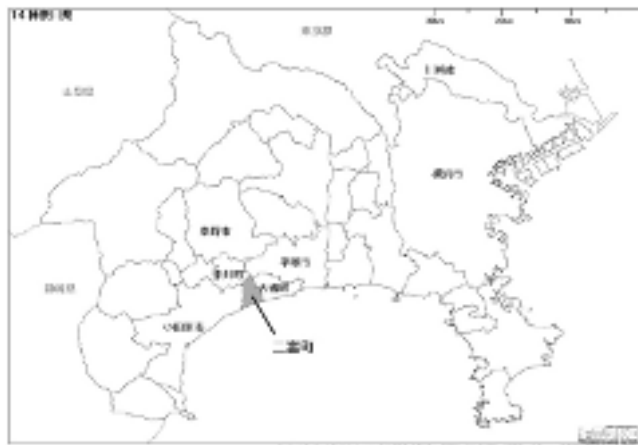


図1： 二宮町の位置



図2： 町内の旧村名

3.2. 調査方法

調査は、話者の方に直接対面し調査票を用いて行った。名詞は調査票に載せた項目語単独の読み上げと、それぞれの語に「が」「の」「に」などの助詞を付けた短文を作って発話をしてもらった。なお、後続する助詞について、一部の調査項目を用いて事前に調査を行い、「が」「を」「に」「と」については調査結果に差が生じないことを確認した。調査語例は名詞が454語、動詞が170語、形容詞が48語で合計672語。

3.3. 話者

中郡二宮町で言語形成期を過ぎた7名の男性の話者を対象に調査を行った。本稿では特に老年層の話者C、青年層の話者Eのアクセントを中心に述べる。以下に話者情報を示す。年齢は調査当時のもの。

老年層話者

話者A (74) 昭和16年生まれ。元教員。一色出身。

話者B (78) 昭和12年生まれ。元会社員。山西出身。

話者C (78) 昭和11年生まれ。元会社員。二宮出身。

話者D (83) 昭和7年生まれ。農業。一色出身。

青年層話者

話者E (28) 昭和61年生まれ。二宮町役場勤務。二宮出身。

話者F (28) 昭和61年生まれ。二宮町役場勤務。山西出身。

話者F（36）昭和54年生まれ。二宮町役場勤務。山西出身。

3.4. 方言の特徴

調査で観察されたアクセント以外の特徴を挙げる。ガ行鼻濁音は両年代に観察された。また、無声子音に挟まれた狭い母音の無声化は両年代で観察され、老年層ではそれに伴うアクセントの下がり目の移動が規則的に観察された。青年層では無声化した拍の後にアクセントの下がり目が保たれる現象が語的に観察された。また、連母音の融合は老年層にみられ、今回の調査では ai → 「エー」、au → 「アー」、oi → 「エー」、ui → 「イー」の4種の融合が観察された。

4. 調査結果

4.1. アクセントの体系

老年層の話者A、青年層の話者Dのアクセントをもとにアクセントの体系を記述する。老年層、青年層ともに、東京語のアクセント同様、アクセントの「下がり目」の有無、そしてその位置が弁別の特徴であり、その対立はn拍の語に対してn + 1種ある。表1にアクセントの体系を示した。

表1：二宮町方言のアクセントの体系

拍	音韻論的解釈	語例
1	/○/	柄、蚊、毛、子、血…
	/○ /	帆、絵、尾、木、酢、田、手、荷…
2	/○○/	飴、蟻、烏賊、梅、釘、行く、着る…
	/○○ /	石、歌、北、寺、足、鍵、坂、…
	/○ ○/	斧、秋、汗、鮎、陰、露、婿、夜、会う、見る、良い…
3	/○○○/	欠伸、錨、鎖、小山、衣、魚、机、上がる、借りる…
	/○○○ /	小豆、力、頭、扇、鏡、刀、瓦…
	/○○ ○/	五つ、境、わらび、朝日、油、余る、起きる、赤い、黒い…
	/○ ○○/	えくぼ、鮑、さざえ、岬、嵐、もみじ、帰る、入る…
4	/○○○○/	網元、驚き、腹巻、夕顔、奥行き、何う、重ねる…
	/○○○○ /	草刈り、足音、塩焼き、長袖、親元、寝返り…
	/○○○ ○/	付合い、頬杖、油菜、雨傘、悲しむ、数える、詳しい、明るい…
	/○○ ○○/	連れ合い、持ち味、花婿、朝顔…
	/○ ○○○/	卯の花、椎茸、たんぼぼ、どんぐり…

4.2. 名詞、動詞、形容詞のアクセント

この項では、1～3拍の名詞、2～3拍の動詞、2～4拍の形容詞のアクセントの調査結果と考察を述べる。

4.2.1. 名詞のアクセント

青年層、老年層ともに、4拍までの名詞でn拍+1種のアクセントの型が観察された。本稿では1～3拍の名詞のアクセントについて述べる。

1拍、2拍の名詞のアクセントは、両年代を通して、東京語のアクセントと共通することが多いが、伝統的なアクセントの保持や、特徴的なアクセントが観察された。以下に順に記す。

1類の「帆」は東京式のアクセントではかつて平板型で発音された語だが、本調査では青年層、老年層ともに東京と同じく新しい起伏のアクセントが観察された。3類の「荷」のアクセントには世代差があり、老年層話者は伝統的な頭高型で発音されたのに対し、青年層の発音はニガ オモイ（荷が重い）のように平板型であった。

2拍2類の「北」は、伝統的な尾高型が、平板型へと変化していると言われている語だが、老年層話者には伝統的なアクセントである尾高型が保たれていた。一方、青年層話者のアクセントは平板型であった。青年層話者はこのほかに、3類の「糠」と、劣勢形ではあったが、2類の「梨」でも平板型のアクセントが観察されている。また、1類の「皿」、「杉」、「塵」、5類の「露」のアクセントは老年層話者の発音は伝統的な平板型であったが、若年層に尾高型のアクセントが観察された。このほか、老年層話者に、1類「滝」、4類「稲」に尾高型のアクセントが観察された。

3拍の名詞のアクセントには、老年層話者に伝統的な尾高型と中高型のアクセントの保持が特徴として挙げられる。

2類の「小豆」「毛抜き」「釣瓶」と4類の「扇」、「拳」、「林」、「東」、「筵」は、より伝統的なアクセントと考えられる尾高型が老年層で観察された。青年層でも2類の「小豆」、「毛抜き」、「釣瓶」は尾高型のアクセントが観察されたが、4類の語はより新しいと考えられる平板型であった。このほか、老年層では見られなかったが青年層で尾高型のアクセントが観察されたものとして1類の「錨」、「鯛」、「鎖」があった。

3類の「鮑」、「小麦」、「さざえ」、5類の「朝日」、「心」、「涙」、「柱」は、老年層で中高型のアクセントが観察された。3拍の名詞の中高型のアクセントは日野資純（1984）等に「いかにも神奈川県的なアクセント」として「茸」、「南瓜」の例が指摘されているが、その2語についても老年層話者の発音からは中高型のアクセントが観察された。青年層話者の発音からはこうした特徴的な中高型のアクセントは観察されず、たとえば「油」、「小

麦」などは平板型、「朝日」、「茸」などは頭高型、「心」、「柱」は尾高型と、東京語の新しいアクセントと同様になっている。

このほか、年代差があったのが、3類の「岬」、4類の「瓦」で、老年層では頭高型、青年層では平板型のアクセントが観察された。

3拍の名詞の尾高型と中高型のアクセントからは、二宮町方言の特徴が見える。秋永一枝(2001)などで行われているように、東京語のアクセントにおいて尾高型は衰退の傾向にあり、平板型など他の優勢なアクセントの型へと変化するとされているが、二宮町方言の老年層話者は衰退する前の姿である尾高型のアクセントを保っていることが観察からわかった。また、青年層話者においても平板型で発音されたものもあったが、一部に尾高

表2：名詞のアクセント

〈〉内の数字は類。*…平板型も。**…尾高型も。***…中高型も。****…頭高型も。

拍	アクセントの型	語例 (老年層)	語例 (青年層)
1	平板型 ○▶	柄、蚊、毛、子、血…〈1〉 名、葉、日、藻〈2〉	柄、蚊、毛、子、血…〈1〉 名、葉、日、藻〈2〉荷〈3〉
	起伏型 ●▶	帆、世〈1〉矢〈2〉絵、尾、木、 酢…〈3〉	帆、世〈1〉矢〈2〉絵、尾、木、 酢…〈3〉
2	平板型 ○●▶	飴、蟻、烏賊、牛…〈1〉 人〈2〉	飴、蟻、烏賊、牛…〈1〉 北、人〈2〉糠〈3〉
	尾高型 ○●▷	滝〈1〉石、岩、歌、音…〈2〉 足、網、泡、家…〈3〉稲〈4〉	皿*、杉、塵〈1〉 石、岩、歌、音…〈2〉 足、網、泡、家…〈3〉露〈5〉
	頭高型 ●○▷	斧、神、雲〈3〉跡、粟、息、糸…〈4〉 秋、汗、雨、鮎…〈5〉	斧、神、雲〈3〉跡、粟、息、糸…〈4〉 秋、汗、雨、鮎…〈5〉
3	平板型 ○●●▶	欠伸、筏、錨、田舎、鯛…〈1〉 間、桜、翼、とかげ、扉、百足、黄 金〈2〉鮠、畑、扇**、仏** 〈4〉すだれ、たすき〈5〉兎、鰻、狐、 雀、背中…〈6〉後ろ、鯨、葉〈7〉	欠伸、筏、田舎、飾り…〈1〉 間、桜、翼、とかげ、扉、百足〈2〉 黄金、小麦、岬〈3〉鮠、扇、瓦、拳、 畑、林、東、筵〈4〉油、すだれ、 たすき〈5〉兎、鰻、狐、雀、背中 …〈6〉後ろ、鯨、葉、盥〈7〉 かぼちゃ***
	尾高型 ○●●▷	小豆、毛抜き、釣瓶、二つ、二人、 夕べ、力〈2〉頭、鏡、刀、林、東* …〈4〉	錨、鯛、鎖〈1〉小豆、毛抜き、釣瓶、 二つ、二人、夕べ〈2〉力〈3〉頭、 鏡、刀…〈4〉心、柱〈5〉
	中高型 ○●○▷	鮑、小麦*、栄螺****〈3〉五つ、 思い〈4〉朝日****、油、心、涙、柱、 枕〈5〉茸、かぼちゃ	五つ、思い、境〈4〉
	頭高型 ●○○▷	えくぼ、緑〈2〉二十歳、岬〈3〉嵐、 瓦、紅葉、わらび〈4〉命、蝶、きゅ うり…〈5〉蚕、兜、便り、椿**、 病〈6〉	えくぼ、緑〈2〉鮑、栄螺、二十歳〈3〉 嵐、紅葉、わらび〈4〉朝日、命、蝶、 きゅうり、枕、涙…〈5〉烏、高さ、 狸〈6〉蚕、兜、便り、椿、病〈7〉 茸

型のアクセントを残していた。東京で起きている変化と比べると、二宮町方言の3拍名詞の尾高型のアクセントは伝統的な姿を残していると言えるだろう。一方の3拍名詞の中高型のアクセントは、老年層に中高型のアクセントが観察された9つの語について、青年層では、東京語と共通するアクセントが観察されており、はっきりとした年代差が見られた。老年層で中高型のアクセントが観察された語のうち、「小麦」、「朝日」、「心」、「涙」などは隣接する東京でも伝統的には中高型であった語として知られており、かつては広く行われていたアクセントが二宮町方言にも残されている例といえる。それに対し、「かぼちゃ」、「茸」、「鮑」、「さざえ」、「柱」は東京語の古いアクセントの姿というよりも、地域的な特色を持つアクセントであると考えられる。

4.2.2. 動詞のアクセント

動詞は、両年代とも終止形のアクセントに平板型と起伏型の型の対立があり、特に2～3拍の動詞は型の対立が明確であった。4拍の動詞では、「養う」や「あざける」など、一部の平板型の動詞に起伏型への統合のきざしが観察された。平板型に対して起伏型が優勢年代差がみられた例のうち、1類の「添う」「突く」、2類の「照らす」は、老年層により伝統的なアクセント（ソウ、つく、テラス）、青年層により新しいアクセント（ソウ、つく、テラス）が観察された例だと考えられる。また、母音の無声化がかかわる語例について、2類の「吹く」は両年代ともアクセントの下がり目が移動した「ふク」という発音であったが、3拍の「隠す」では青年層の発音に、下がり目の移動しない中高型の「カクス」というアクセントが観察された。表3に話者C、Eの動詞の終止形のアクセントを一覧に示す。

表3：動詞終止形のアクセント

拍	アクセントの型	語例（老年層）	語例（青年層）
2	平板型 ○●	行く、産む、売る、追う、置く、添う、突く、拭く、する、煮る、寝る…〈1〉着く、吹く〈2〉	行く、産む、売る、追う、置く、拭く、する、煮る、寝る…〈1〉吹く〈2〉
	起伏型 ●○	会う、編む、打つ、書く、来る、出る…〈2〉	添う、突く 会う、編む、打つ、書く、着く、来る、出る…〈2〉
3	平板型 ○●●	上がる、遊ぶ、隠す、当たる、開ける、借りる…〈1〉違う〈2〉	上がる、遊ぶ、当たる、開ける、借りる…〈1〉違う、照らす〈2〉
	起伏（中高）型 ○●○	慕う〈1〉余る、祝う、懐く、生きる、掛ける…〈2〉	余る、祝う、隠す、懐く、生きる、掛ける…〈2〉
	起伏（頭高）型 ●○○	帰る、入る〈2〉	帰る、入る〈2〉

つづいて、動詞の活用形のアクセントについて述べる。活用形のアクセントにも型の対立が見られた。終止形のアクセントで2～3拍の動詞に対して4拍の語は型の対立が不明瞭であることは先に述べたが、活用形のアクセントでもそれは同様で、終止形単独よりもさらに揺れが多く観察された。表4に2～3拍の動詞の活用形のアクセントの例を示す。

表4：動詞の活用形のアクセント

語例	活用形	活用形（老年層）		活用形（青年層）	
売る (五段・平板)	終止・連体	ウル ウルコト ウルソーダ ウルダロー	ウルノガ ウンベ ウルラシー	ウル ウルコト ウルソーダ ウルダロー	ウルノガ ウルラシー
	未然・意向	ウラナイ ウロー	ウラセル ウラレル	ウラナイ ウロー	ウラセル ウラレル
	連用・音便	ウリマす ウリソー ウリテー	ウリニイク ウツテ ウツタ	ウリマす ウリソー ウリタイ	ウリニイク ウツテ ウツタ
	仮定・命令	ウレバ	ウレ	ウレバ	ウレ
蒔く (五段・起伏)	終止・連体	マク まくコト まくソーダ マクダロー	マクノガ マクベ マクラシー	マク まくコト まくソーダ マクダロー	マクノガ マクベ マクラシー
	未然・意向	マカナイ マコー	マカセル マカレル	マカナイ マコー	マカセル マカレル
	連用・音便	マキマす まきソー まきてー	マキニイク マイテ メータ	マキマす まきソー まきタイ	マキニイク マイテ マイタ
	仮定・命令	マケバ	マケ	マケバ	マケ
着る (一段・平板)	終止・連体	キル キルコト キルソーダ キルダロー	キルノガ キンベ キルラシー	キル キルコト キルソーダ キルダロー	キルノガ キルラシー
	未然・意向	キナイ キヨー	キサセル キレル	キナイ キヨー	キサセル キラレル
	連用・音便	キマす きソー きてー	キニイク きて きタ	キマす きソー きタイ	キニイク きて きタ
	仮定・命令	キレバ	キロ	キレバ	キロ

見る (一段・起伏)	終止・連体	ミル ミルコト ミルソーダ ミルダロー	ミルノガ ミンペー ミルラシー	ミル ミルコト ミルソーダ ミルダロー	ミルノガ ミルラシー
	未然・意向	ミナイ ミヨー	ミサセル ミレル	ミナイ ミヨー	ミサセル ミラレル
	連用・音便	ミマす ミソー ミテー	ミニイク ミテ ミタ	ミマす ミソー ミタイ	ミニイク ミテ ミタ
	仮定・命令	ミレバ	ミロ	ミレバ	ミロ
遊ぶ (五段・平板)	終止・連体	アソブ アソブコト アソブソーダ アソブダロー	アソブノガ アソブペー アソブラシー	アソブ アソブコト アソブソーダ アソブダロー	アソブノガ アソブラシー
	未然・意向	アソバナイ アソポー	アソバセル アソバレル	アソバナイ アソポー	アソバセル アソバレル
	連用・音便	アソビマす アソビソー アソビテー	アソビニイク アソンデ アソンダ	アソビマす アソビソー アソビタイ	アソビニイク アソンデ アソンダ
	仮定・命令	アソベバ	アソベ	アソベバ	アソベ
隠す (五段・中高)	終止・連体	かくス かくスコト かくすソーダ かくスダロー	かくスノガ かくスペー かくスラシー	かくス かくすコト かくすソーダ かくスダロー	かくスノガ かくスラシー
	未然・意向	かくサナイ かくソー	かくサセル かくサレル	かくサナイ かくソー	かくサセル かくサレル
	連用・音便	かくシマす かくシソー かくシテー	かくシニイク かくシテ かくシタ	かくシマす かくシソー かくシタイ	かくシニイク かくシテ かくシタ
	仮定・命令	かくセバ	かくセ	かくセバ	かくセ
帰る (五段・頭高)	終止・連体	ケール ケールコト ケールソーダ ケールダロー	ケールノガ ケーンペー ケールラシー	カエル カエルコト カエルソーダ カエルダロー	カエルノガ カエルラシー
	未然・意向	ケーラネー ケーロー	ケーラセル ケーレル	カエラナイ カエロー	カエラセル カエラレル
	連用・音便	カエリマす ケーリソー ケーリテー	ケーッテ ケーッタ	カエリマす カエリソー カエリタイ	カエリニイク カエッテ カエッタ
	仮定・命令	ケーレバ	ケーレ	カエレバ	カエレ

借りる (一段・平板)	終止・連体	カ Ril カ Rilコト カ Rilソーダ カ Rilダロー	カ Rilノガ カ Rinベ カ Rilラシー	カ Ril カ Rilコト カ Rilソーダ カ Rilダロー	カ Rilノガ カ Rilラシー
	未然・意向	カ Riナイ カ Riヨ	カ Riサセル カ Riラレル	カ Riナイ カ Riヨ	カ Riサセル カ Riラレル
	連用・音便	カ Riマす カ Riソー カ Riテー	カ Riニイク カ Riテ カ Riタ	カ Riマす カ Riソー カ Riタイ	カ Riニイク カ Riテ カ Riタ
	仮定・命令	カ Riレバ	カ Riロ	カ Riレバ	カ Riロ
掛ける (一段・起伏)	終止・連体	カ ケル カ ケルコト カ ケルソーダ カ ケルダロー	カ ケルノガ カ ケンベ カ ケルラシー	カ ケル カ ケルコト カ ケルソーダ カ ケルダロー	カ ケルノガ カ ケルラシー
	未然・意向	カ ケナイ カ ケヨ	カ ケサセル カ ケレル	カ ケナイ カ ケヨ	カ ケサセル カ ケラレル
	連用・音便	カ ケマす カ ケソー カ ケテー	カ ケニイク カ ケテ カ ケタ	カ ケマす カ ケソー カ ケタイ	カ ケニイク カ ケテ カ ケタ
	仮定・命令	カ ケレバ	カ ケロ	カ ケレバ	カ ケロ

それぞれの活用形のアクセントを見ると、東京語の動詞活用形のアクセントと共通する点が多くあったが、1類（平板型）の動詞の活用形の一部に特徴的なアクセントが観察された。

一点目が連用形に「に行く」が接続した場合のアクセントで、「アソビニユク」および助詞が脱落した「アソビイク」に動詞の部分が尾高型で発音された。この現象は、都竹通年雄（1951）や田中ゆかり（2011）などに指摘があり、首都圏周辺域にかつて広く分布していたと考えられている。二宮町方言においては、老年層でこのアクセントが観察され、1類の動詞についてはほぼ規則的に尾高型のアクセントが表れた。しかし、青年層では「アソビニイク」と規則的に平板型で発音されており、尾高型アクセントの衰退が生じていることがうかがえる。

例：「連用形+に行く」のアクセント

	老年層	青年層
「売りに行く」	ウリニユク	ウリニイク
「遊びに行く」	アソビニユク	アソビニイク

二点目が、連体形に準体助詞「の」が接続した場合のアクセントで、老年層では「フクノガ」（吹くのが）のように東京と同じ尾高型のアクセントとともに、「アソブノガ」（遊ぶのが）のように助詞「の」まで高く続き、「の」の後に下がり目があるアクセントも観

察された。一方の青年層では「アソブノガ」と東京と同様のアクセントのみ観察された。

例：「連体形+の」のアクセント

	老年層	青年層
「売るのが」	ウルノガ	ウルノガ
「遊ぶのが」	アソブノガ	アソブノガ

三点目が、終止形に「だろう」が接続した場合のアクセントである。秋永一枝（2001）、NHK放送文化研究所（2016）を参照すると、たとえば「ナクダロー」のようにそのまま高く「だろう」が接続し、「ろ」拍の後で下がると述べられている。そして、秋永一枝（2001）にはナクダローのように「低く下がってつく傾向もみられる」と指摘がある。二宮町方言では、老年層ではそのまま高くつく前者のアクセント、青年層では下がってつく後者のアクセントが観察され、それぞれのアクセントは規則的に発音されていた。

例：「終止形+だろう」のアクセント

	老年層	青年層
「売るだろう」	ウルダロー	ウルダロー
「遊びに行く」	アソブダロー	アソブダロー

以上の三点が動詞の活用形のアクセントで特徴がみられた点で、年代差がみられた点とも言える。「連用形+に行く」のアクセントは、先行研究でも指摘があるとおり、関東西南部に共通して起きていた現象であり、それが今回の調査で老年層に観察された。一方の、「連体形+の」のアクセントは、先行研究を見る限り類例がない独特のアクセントであった。そして、「終止形+だろう」のアクセントは、東京語のアクセントと照らし合わせると、老年層のほうでより東京語と共通するアクセントが行われていることがわかった。

次に、動詞のアクセントの、母音の無声化にかかわる事象について述べる。

二宮町方言は無声子音に挟まれた狭い母音の無声化が規則的に生じるという特徴を持つ。また、母音の無声化に伴い特に老年層では規則的にアクセントの下がり目が移動する。終止形のアクセントのところでも触れたが、今回調査した語例の中には「カクス」（隠す）や「ナつく」のように母音の無声化が生じる環境を含むものがある。その中で「拭く」と「吹く」、「突く」と「着く」は2類（起伏型）の「吹く」、「着く」が「ふく」、「つく」と無声化し、それに伴って、慎重な発音では「フク」、「ツク」であったアクセントに、下がり目の後退が生じて「ふク」「つく」と発音され、見かけ上は「拭く」、「突く」と同じ発音になる。しかし、活用形のアクセントを観察すると、無声化が生じない活用形については平板型、起伏形の対立が保たれていた。連用形の「拭きに行く」、「吹きに行く」は老年層でも同じ発音、アクセントの姿であるように見えるが、これは終止形同様、起伏型の「吹

きに行く」の語頭が無声化し、アクセントの下がり目が移動していることによる。なお、終止形のところでも指摘したが、「突く」は青年層では活用形のアクセントも「着く」と同じ起伏型のアクセントが観察された。

表5に「拭く」と「吹く」の活用形のアクセントを示す。

表5：「拭く」と「吹く」、「書く」の活用形のアクセント

語例	活用形	活用形（老年層）		活用形（青年層）	
拭く	終止・連体	ふク ふクコト ふクソーダ ふクダロー	ふクノガ ふクベー ふクラシー	ふク ふクコト ふクソーダ ふクダロー	ふクノガ ふクベー ふクラシー
	未然・意向	ふカナイ ふコー	ふカセル ふカレル	ふカナイ ふコー	ふカセル ふカレル
	連用・音便	ふキマす ふキソー ふキテー	ふキニイク フイテ フイタ	ふキマす ふキソー ふキタイ	ふキニイク フイテ フイタ
	仮定・命令	ふケバ	ふケ	ふケバ	ふケ
吹く	終止・連体	ふク ふクコト ふクソーダ ふクダロー	ふクノガ ふクベー ふクラシー	ふク ふクコト ふクソーダ ふクダロー	ふクノガ ふクベー ふクラシー
	未然・意向	ふカナイ ふコー	ふカセル ふカレル	ふカナイ ふコー	ふカセル ふカレル
	連用・音便	ふキマす ふキソー ふキテー	ふキニイク フイテ フイタ	ふキマす ふキソー ふキタイ	ふキニイク フイテ フイタ
	仮定・命令	ふケバ	ふケ	ふケバ	ふケ

4.2.3. 形容詞のアクセント

東京アクセントは、伝統的には、形容詞の終止形のアクセントに伝統的に平板型と起伏型の型の対立があると言われている。二宮町方言では、終止形のアクセントについては両年代ともに起伏型への統合が観察されたが、その姿には年代差があった。

老年層では、以下に示すように形容詞の語末に含まれる連母音の融合が生じる。

例： アケー（赤い）、タケー（高い）、ネムッター（眠たい）

オエー（多い）、トエー（遠い）

ウシー（薄い）、ヒキー（低い）、アカリー（明るい）

連母音が融合した発音の場合、形容詞終止形のアクセントはすべて起伏型で発音される。老年層の中で非融合の発音をした際に平板型のアクセントが現れる話者もいたが、その話

者も普段の談話においては融合形を主に使用するという意識があり、連母音が融合し、起伏型で発音をするのが老年層における形容詞終止形の実態と考えられる。

一方、青年層では、連母音の融合はあまり観察されず非融合の発音が優勢であった。アクセントの型は、一語「遠い」のみ平板型が観察されたが、そのほかはすべて起伏型で発音されていた。表6に話者Cと話者Eの形容詞終止形のアクセントをまとめた。なお、老年層は連母音が融合した場合のアクセントを示している。また、5拍とした「細かい」と「眠たい」の2語は「コマッケー」、「ネムッテー」と促音の挿入が生じた例である。

続いて、活用形のアクセントについて述べる。

表6：形容詞終止形のアクセント

拍	アクセントの型	語例（老年層）	語例（青年層）
2	起伏型 ●○	無い、良い、濃い〈2〉	無い、良い、濃い〈2〉
3	平板型 ○●●		遠い〈1〉
	起伏型 ○●○	赤い、浅い、厚い、甘い、荒い、薄い、遅い、固い、軽い、暗い、遠い〈1〉 熱い、多い、黒い、白い、高い、近い、強い、長い、早い、低い、深い、古い、弱い〈2〉	赤い、浅い、厚い、甘い、荒い、薄い、遅い、重い、固い、軽い、暗い、遠い〈1〉 熱い、多い、黒い、白い、高い、近い、強い、長い、早い、低い、深い、古い、弱い〈2〉
4	起伏型 ○●●○	明るい、危ない、重たい、悲しい、冷たい、手厚い、尊い、空しい〈1〉 うるさい、嬉しい、大きい、可愛い、汚い、詳しい、親しい、涼しい、正しい、等しい、短い〈2〉	明るい、危ない、重たい、悲しい、冷たい、手厚い、眠たい、尊い、空しい〈1〉 ②うるさい、嬉しい、大きい、可愛い、汚い、細かい、詳しい、親しい、涼しい、正しい、等しい、短い〈2〉
5	起伏型 ○●●●○	細かい、眠たい〈2〉	

表7に形容詞1類（東京で伝統的に平板型）の「遅い」と2類（東京で伝統的に起伏型）の「長い」の活用形のアクセントをまとめた。先に述べた終止形のアクセントでは、両年代に起伏型への統合が生じていることを指摘したが、活用形のアクセントについても1類と2類のアクセントは共通する点が多い。そして、老年層に見られるアクセントの揺れから、老年層に於いて活用形のアクセントが統合の変化の最中にあると考える。

老年層に見られるアクセントの揺れは、1類の形容詞連体形に「こと」が接続したときと、2類形容詞連用形に「ない」、「なる」が接続したとき、そして、2類形容詞仮定形に

表7：形容詞の活用形のアクセント

語例	活用形	活用形（老年層）		活用形（青年層）	
遅い (1類)	終止・連体	オセー オセーコト (オセーコトとも) オセーソーダ	オセーダロー オセーノガ オセーラシー	オソイ オセー オソイコト	オソイダロー オソイノガ オソイラシー
	未然	オソカロー	オソカンベ		
	連用	オソクテ オソクネー	オソクナル	オソクテ オソクナイ	オソクナル
	仮定・語幹	オソケレバ	オソソー	オソケレバ	オソソー
長い (2類)	終止・連体	ナゲー ナゲーコト ナゲーソーダ	ナゲーダロー ナゲーノガ ナゲーラシー	ナガイ ナゲー ナガイコト ナガイソーダ	ナガイダロー ナガイノガ ナガイラシー
	未然	ナガカロー	ナガカンベ		
	連用	ナガクテ ナガクネー (ナガクネーとも) ナガクネーとも	ナガクナル (ナガクナル ナガクナルとも)	ナガクテ ナガクナイ	ナガクナル
	仮定・語幹	ナガケレバ (ナガケレバとも)	ナガソー	ナガケレバ	ナガソー

「ば」が接続したときに生じている。また、老年層で揺れが生じている活用形は、青年層において1類、2類のアクセントの統合が生じている箇所でもある。

例：「遅いこと」 オセーコト（オセーコトとも）

「長くない」 ナガクネー（ナガクネー・ナガクネーとも）

「長くなる」 ナガクナル（ナガクナル・ナガクナルとも）

「長ければ」 ナガケレバ（ナガケレバとも）

1類形容詞連体形+「こと」のアクセントは、平板型のアクセントが保たれていれば「オセーコト」のように尾高型で発音されることが期待されるが、実態は起伏型と同様の中高型「オセーコト」が優勢であった。そして青年層では「オソイコト」と中高型でのみ発音されるようになる。つまり、形容詞連体形+「こと」のアクセントは老年層においては揺れが生じていたが青年層において平板型から起伏型のアクセントへと変化したと解釈できる。

2類形容詞の連用形と仮定形のアクセントについては変化の方向が異なる。例に挙げた「長くない」、「長くなる」、「長ければ」はそれぞれ老年層のアクセントは頭高型が優勢で、これにより平板型との対立を保っていた。しかし、連用形+「なる」および「ない」は同

一話者の間でも中一高型と中三高型との揺れが生じており、仮定形+「ば」では中高型（中一高型）との揺れが生じていた。そして、青年層のアクセントを観察すると、連用形は両者とも中三高型、仮定形は中高型（中一高型）で安定しており、これらの活用形については起伏型の形容詞の活用形のアクセントが平板型のアクセントに変化したと解釈される。

このように、二宮町方言の形容詞活用形のアクセントは起伏型から平板型への変化、平板型から起伏型への変化という両方向のアクセントの変化を含みながら、アクセントの型の対立を失っていると言える。なお、表8で示すように「厚い」、「熱い」のような同音異義語の形容詞においても型の統合は生じており、アクセントによる意味の区別は行われていない。

表8：「厚い」と「熱い」の活用形のアクセント

形容詞	活用形	活用形（老年層）		活用形（青年層）	
厚い	終止・連体	アツイ アチー アチーコト アチーソーダ	アチーダロー アチーノガ アチーラシー	アツイ アツイダロー アツイノガ アツイコト アツイソーダ	アツイダロー アツイノガ アツイラシー
	未然	アツカロー	アツカンベ		
	連用	アツクテ アツクネ	アツクナル	アツクテ アツクナイ	アツクナル
	仮定・語幹	アツケレバ	アツソー	アツケレバ	アツソー
熱い	終止・連体	アツイ アチー アチーコト アチーソーダ	アチーダロー アチーノガ アチーラシー	アツイ アツイダロー アチー アツイコト アツイソーダ	アツイダロー アツイノガ アツイラシー
	未然	アツカロー	アツカンベ		
	連用	アツクテ アツクネ	アツクナル	アツクテ アツクナイ	アツクナル
	仮定・語幹	アツケレバ	アツソー	アツケレバ	アツソー

5. おわりに

以上、二宮町で生育した話者を対象にした調査をもとに、二宮町方言のアクセントの実態を示し、年代による差を観察した。二宮町方言の老年層話者の発音には、同方言のアクセントの古い姿を残していると考えられる特徴が観察された。その中には、東京でかつて行われていた伝統的なアクセントと共通するものと、東京語のアクセントとは特徴が異なる、同地点特有と考えられる特徴とがあった。また、青年層のアクセントを見ると、世代が下ったことによるアクセントの変化も観察することができた。名詞、動詞については、

老年層が保持していた伝統的な方言の特徴が失われ、いわゆる共通語化した姿が観察された。また、形容詞については、対立のあったアクセントの型の統合という変化が生じていた。

このように、二宮町方言のアクセントでは伝統的な特徴の衰退と、共通語化も含めた変化が生じている。先述の通り、神奈川県方言の伝統的な姿を記述した研究は豊富であるとは言えない。今後さらなる調査を急ぎたい。

参考文献

- NHK 放送文化研究所（1998）『新版 NHK 日本語発音アクセント辞典』NHK 出版
- NHK 放送文化研究所（2016）「助詞・助動詞等の付属語が付いたときの発音とアクセント」『NHK 日本語発音アクセント新辞典』付録 NHK 出版
- 秋永一枝（2001）「東京アクセント習得法則」金田一春彦・監『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 金田一春彦・監修 秋永一枝・編（2010）『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』三省堂
- 坂本薫（2015）「神奈川県中郡二宮町方言の地名のアクセント」平成27年度國學院大學国語研究会前期大会 発表資料
- 田中ゆかり（1991）「人口急増地域における若年層の言語 - 神奈川県中央地区の場合 -」『国文学研究』117 早稲田大学国文学会
- 田中ゆかり（2011）「I 類動詞連用形尾高型の消失」『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
- 都竹通年雄（1951）「動詞の連用形とアクセント」（寺川喜四夫ほか編（1951）『国語アクセント論叢』初出）都竹通年雄（1994）『都竹通年雄著作集1 音韻・方言研究編』ひつじ書房より
- 日野資純（1952）「相模方言の素描（その方言区画）」『国語学』9 武蔵野書院
- 日野資純（1984）「神奈川県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤良一編『講座方言学5 関東地方の方言』国書刊行会
- 平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』育英書院
- 平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
- 平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』東京堂
- 平山輝男（1968）『国語の音声』岩崎書店
- 二宮町 Web サイト <http://www.town.ninomiya.kanagawa.jp/>